

拜啓 秋冷の候 ますますご清栄のこととお慶び申し上げます。
夏から急に冬になったような気候となり、風邪を引いた方も多い
ようです。皆様はご無事でお過ごしでしょうか。

第三十回随筆春秋賞は八七九本の応募があり、このほど上位
二〇本の入選作が決定しました。入選者は別紙のとおりですが、
例年にも増して、会員の皆様の健闘が光るコンクールとなりまし
たことをお礼申し上げ、ご報告させていただきます。

第六十三号の締め切りは十二月十五日です。

事務局に原稿を送ってくださる時に、まだ年度賞の推薦がお済
みでない方は、第六十一号から三本、六十二号から三本、これは
良いと思われる作品を書いて送ってください。

今年から表彰式にご参加くださっている中山庸子先生は、昨年
の年度賞をお読みになつて、粒ぞろいの秀作に敬服しましたとお
っしゃってくださいました。私たちが書き続けていることのエネ
ルギーが、一つ一つの作品を陶冶する働きにつながっていると考
えます。会員互選の年度賞の推薦は、その中の、さらに光る宝玉
を探すことに似ております。

皆様の投票をお待ちしております。

さて、私ごとではございますが、来年一月『こんけんどうエッ
セイ集 第六集 妻の生還』を上梓する運びとなりました。顧み
ますれば西暦二〇〇〇年ごろからコツコツと書きためたエッセイ
を、勤務先のホームページに掲載し続けて参りましたが、それが
なかなかの量となつておりました。富山編集長の熱心な勧めで、
書きためたエッセイを中心に随筆春秋出版サポートセンターから
刊行し、すでに丸三年が過ぎました。

『祝電』

二〇二一年十一月刊行

『風船の女の子』

二〇二二年六月刊行

『昆布干しの夏』 二〇二三年五月刊行

『介錯人の末裔』 二〇二三年十一月刊行

『増穂の小貝』 二〇二四年九月刊行

『妻の生還』 二〇二五年一月刊行予定

ただ発表のあてもなく書いていた時には、思いもよらぬことでしたが、北海道新聞でも取材され、故郷様似の図書館にも全巻常備してもらっています。こうして自分の本の背表紙がずらりと並んでいるのを見ますと、やはり書くことの生きがいと申しますか、確かな手ごたえを感じます。

富山編集長が随筆春秋に参加してから新規に発足した出版サポートセンターですが、創立の理念として「会員諸氏に格安で出版サービスを提供する」という旗を掲げております。私もその恩恵を受けている一人です。

最近は言葉巧みに自費出版を持ちかけ、高額な費用を受け取ったままろくにアフターフォローをしないという業者が増えています。うっかり多額の資金を投じて後悔なさることがないように、相見積もりに加えていただけたらと思います。

作品の出版を考えておられる皆様からのご相談を、お待ちしております。おります。

末筆ながら皆様のご健筆とご多幸を心よりお祈り申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。 敬具

令和六年十一月二十日

一般社団法人随筆春秋

代表 近藤 健